

## ウィリアム・ブレイク

William Blake

(ロンドン 1757- ロンドン 1827)

## ◆ブレイクの生涯

1757年11月28日、靴下職人・メリヤス類の製造販売を生業とする8人家族の三男として生まれる。生家はロンドンのブロード街(現ブロードウィック街)28番地。

1767年ヘンリー・パーズ画塾に入学。「さまざまな古代美術の石工模倣から素描術を習得」する。1772年、銅版画師ジェームズ・バサイア(1730-1802)の徒弟として年季奉公の契約を結ぶ。7年の徒弟期間を終えた後、1779年にはロイヤル・アカデミー附属の美術学校に入学を許されるも、学校からは次第に足が遠のき、挿絵画家の下絵を元にした銅版画を彫るなどして生計をたてる。1780年代末より、『無垢の歌』、『無垢と経験の歌』、『ユアズンの書』といった、自作の詩に挿絵を添えた「彩飾本(Illuminated Books)」の発行を行う。これは、テキストと挿絵・装幀を一枚の版に載せて刷るブレイク独自の形式で、美術と文学の融合を目指したものであった。1790年代後半以降は、ミルトンの『失楽園』、ダンテの『神曲』、『ヨブ記』などに着想の源を求め、テキストの独自の解釈による幻想的なヴィジョンを描いた。1827年8月12日、ロンドンにて没。

## ◆18世紀後半のイギリスの銅版画界

ブレイクが活躍した時代は、銅版画において、かつてない程に多様な技法が考案された時代でもあった。それらは、例えば光のグラデーション、絹や毛皮などの材質感、さらには人体の筋肉の複雑な起伏などを見事に紙の上に描き出し、より巧妙に、より効率よく表現するための工夫が次々と生みだされていった。

当時、銅版画に期待されていた第一の役割とは、画家の独創的な着想による芸術的な表現ではなく、過去の巨匠の油彩画の複製や、古代の遺物や歴史的事実の記録であることであった。そこでは対象を正確に再現することが何よりも求められていたのであった。

このような潮流にあって、自らの技術に対する揺るぎない自負と、研ぎ澄まされた言語感覚、そして誰も到達し得ない独自の世界を描かんとしたブレイクの試みは特異であったと言え、その評価が高まるのに20世紀を待たねばならないのも当然であった。



作者不詳

《ウィリアム・ブレイクの肖像》

ウィリアム・ブレイクの生地  
(1963年頃に取り壊され現存せず)

J.S.デウアイル

《ブレイクのライフマスク》

1823年